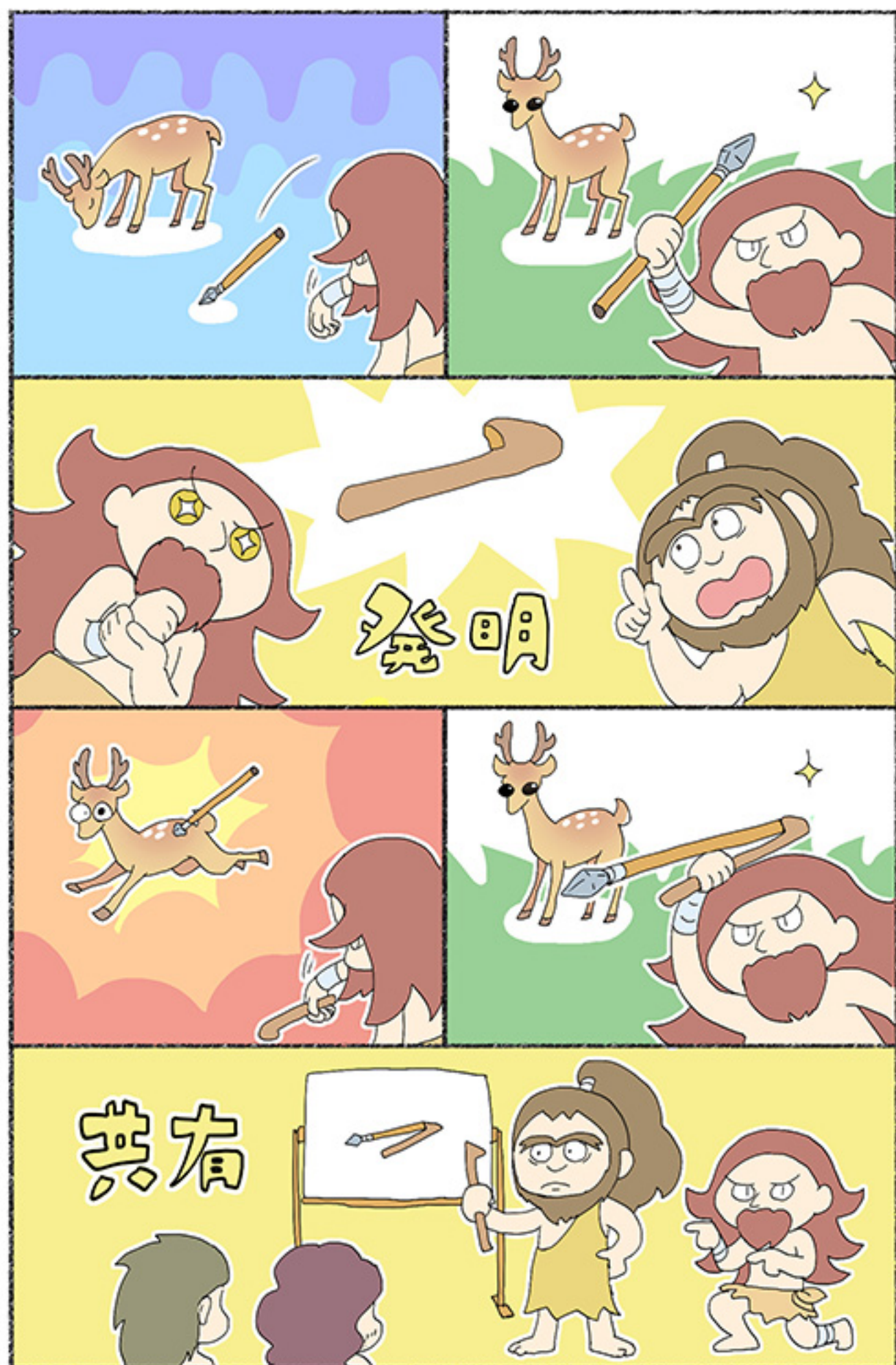


なぜネアンデルタール人は 滅びたか

文・岡林 秀明



なぜネアンデルタール人は滅びたか

現世人類であるホモ・サピエンスが生き残り、一時は隆盛を誇ったネアンデルタール人が滅びてしまった理由は何か。

ネアンデルタール人は約 40 万年前に登場、数万年前に絶滅したヒト属の一種だ。昔は旧人と呼ばれていたが、ホモ・サピエンスの直接の祖先ではないことがわかり、近年は旧人と呼ばれることはない。

知能が高く、筋骨隆々、運動能力も優れ、明らかに進化の頂点に達していた。約 30 万年前に出現した新参のホモ・サピエンスはネアンデルタール人と比べると、いろいろな点で劣っていた。知能こそネアンデルタール人と同程度だったものの、体格は貧弱で、運動能力も低く、とうてい厳しい環境変化を生き延びられるとは思えなかった。

ところが、実際に生き延びたのはネアンデルタール人ではなく、ホモ・サピエンスだった。2018 年 5 月 13 日に NHK 総合テレビで放送された『NHK スペシャル人類誕生』では人類学の最新の成果にもとづき、その理由が明かされた。

強いものではなく、変化できるものだけが生き残る

キーワードは「集団生活」だ。ネアンデルタール人が、せいぜい十数人の家族単位で生活していたのに対し、ホモ・サピエンスの集団は数十人、数百人に及んだ。数百人となると、ムラといってもいい規模だ。これだけの人数が集団生活を送るとなると、コミュニケーションをとるために言語の発達が促される。何か新しい発見や改良があるたびに、その情報は言語化され、集団のなかで共有化された。

たとえば、石器もネアンデルタール人のものが、30 数万年にわたって、ほとんど進化しなかったのに対し、ホモ・サピエンスのものは、ひっきりなしに改良が加えられ、より精度の高いものへと磨き上げられていった。個人が行ったイノベーションや改良・改善であっても言語化され、集団で共有されることで、「文化」として定着する。その文化は世代を超えて受け継がれ、集団の強みとなった。

そうした「文化の厚み」がホモ・サピエンスとネアンデルタール人の運命を分けたのだ。個々の能力が高かったとしても、限界はある。環境の変化に対して、個人もしくは家族で対応するしかなかったネアンデルタール人に対し、文化（先人や集団の経験・知恵の集積）によって対処したホモ・サピエンス。

ダーウィンがいったとされる「強いもの・賢いものが生き残るのではない。変化できるものだけが生き残る」という言葉が胸に突き刺さる。

音声を記録し、文字に変えることの重要性

このエピソードは、いろいろな教訓を私たちに与える。企業や組織、コミュニティも同様で、従来は「暗黙知」でしかなかった個人の経験や知恵、工夫を言語化・文字化・見える化し、皆と共有することで「文化」として育てていけば、その企業、組織、コミュニティの「生き残り」の可能性が高まる。

この機会に音声を記録し、文字に変えることの重要性を考えてみたい。